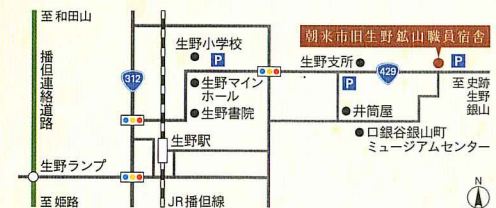
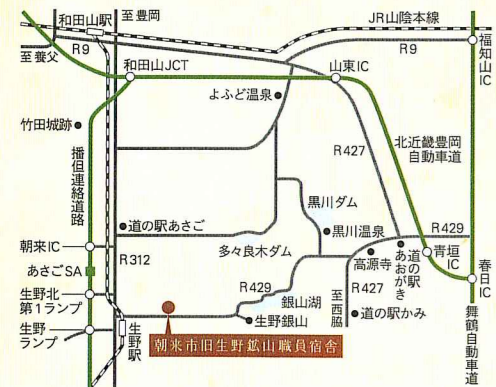


朝来市旧生野鉾山職員宿舎
甲社宅



◎交通アクセス
 [車] 姫路から約1時間、京阪神から約2時間、福知山・綾部から約1時間(播但連絡道路経由)
 [鉄道] 姫路から約1時間、京阪神から約2時間15分、福知山から約1時間15分(JR播但線生野駅下車、徒歩約15分)

朝来市旧生野鉾山職員宿舎
甲社宅

志村喬記念館
Shimura Takashi Museum

〒679-3301 兵庫県朝来市生野町口銀谷697番1
 Telephone & Facsimile 079-670-5005
<http://asago-net.jp/users/kousyataku/index.html>
 E-mail:kousyataku@asago-net.jp

◎入館無料 ◎開館時間/午前9時～午後5時(入館午後4時30分迄) ◎休館日/月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始



Facebook



HP



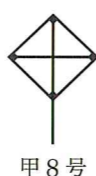
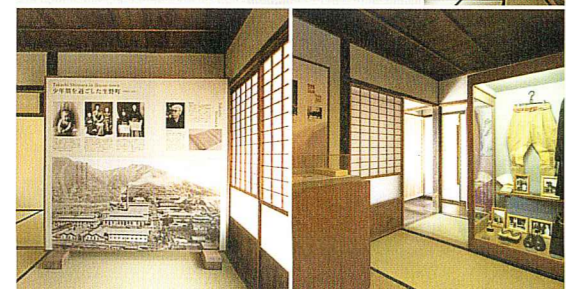
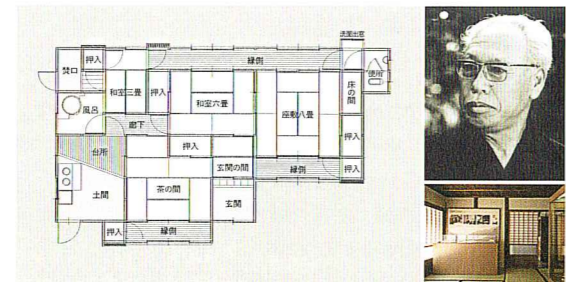
甲7号

Ikuno Mine
Older Official
Residence

大正期に復原 志村喬記念館

- ・7号は煉瓦積みによる台所の増築などがよく残存し、座敷や縁など内部の状態が相対的に良く残っている。
- ・後年の増築部分はできるだけ保存:茶の間と縁側、台所西側の半間増築部分、玄関まわりの改築(縮小)、他。
- ・台所は一部床板を張りとし土間に復す。煉瓦のお竈と人造石の流しを設ける。
- ・風呂は長州風呂(五右衛門)に戻す。
- ・建具は木製ガラス戸(雨戸と併用)障子は一部ガラス入り。

Shimura Takashi Museum

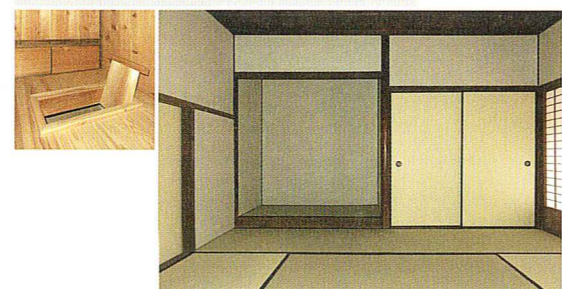
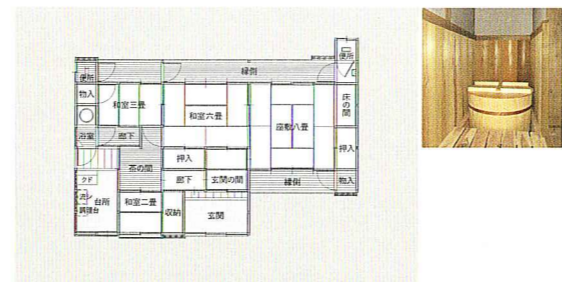


甲8号

Ikuno Mine
Older Official
Residence

明治9年の状態に復原

- ・最も粗雑な改造がなされているため、それらの改造部分を取り除いて、明治初頭に復す。
- ・ガラス戸は無く、雨戸と障子のみの状態に復す。
- ・玄関は間口1間半に復す。
- ・台所は土間に復し、お竈と板敷置き流し台(上水なし)
- ・風呂があったかどうか不明であるが、用途が分からなかった部屋に木製風呂桶(焚き口無し)を置き、体を洗う場所として推定復元。
- ・南側の縁は当初の形態に戻し、東側の便所を復原、西側の便所も復原(便所は利用不可)。
- ・建具は雨戸のみ、板扉、襖とするが、障子は全て腰板付障子。

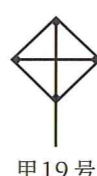
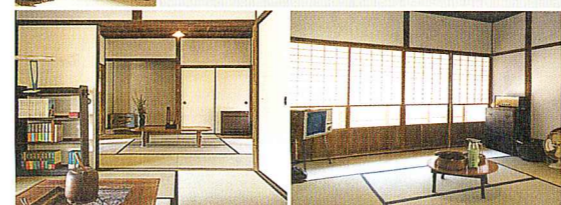
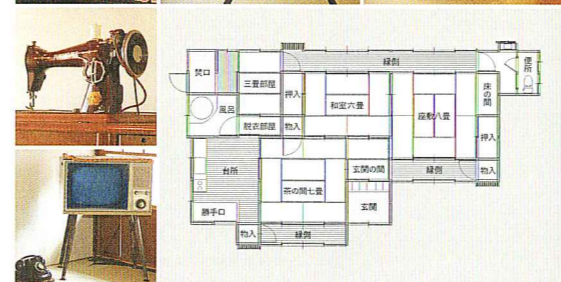


甲9号

Ikuno Mine
Older Official
Residence

昭和初期から昭和30年代までの期間に復す

- ・9号はそのまま使えるほど残存状態がいいので、あまり手を加えずに昭和初期に戻す。
- ・宿泊体験することができるように、台所の設備類や便所の機器は現代の設備を用いる。
- ・三畳部屋(撤去)を除き、原則として現況間取りを優先する。
- ・建具は木製ガラス戸とし、雨戸を設ける。
- ・風呂は長州風呂(五右衛門)とし、床や腰壁は人造石研ぎ出しとする。
- ・空調:体験者の利活用のため床置タイプを設置。



甲19号

Ikuno Mine
Older Official
Residence

明治29年以降明治後期、

- 時代が輻輳した状態であることから、構造的な補強を行う他は現状を尊重
- ・19号は転用材が多く使われ、保存状態も極めて悪いため、現況を留めつつも、可能であればこの建物が建てられたと推察される三菱社有以後、すなわち明治後期を一応の目処として復す。
- ・地区住民の利用が可能のように、台所の設備類や便所の機器は現代の製品を用いる。
- ・風呂はタイル張りとし、2名程度の使用が可能な現況の広さを確保する。
- ・窓廻り、ガラス戸などの意匠を残す。
- ・小屋組、壁、床等に適切な補強を行う。
- ・空調:体験者の利活用のため床置タイプを設置。





朝来市旧生野鉱山職員宿舎（甲社宅）

かつて「佐渡の金、生野の銀」といわれた兵庫県朝来市生野町。生野鉱山は、明治時代の近代化で、鉱山、工場、鉱石輸送路、水路、職員住宅などが一体的に開発された全国でも珍しい鉱山町です。生野のまちに、今も息づく繁栄時代の古い民家。その町並みに平成22年9月、「甲社宅」の通称で親しまれた鉱山職員の住宅が朝来市旧生野鉱山職員宿舎として再生しました。甲7号、8号、9号は、生野に現存する鉱山職員の住宅で最も古く、日本人の近代の生活様式を残す貴重な遺構です。甲8号と甲19号は明治時代に、甲7号は大正時代に復しました。甲9号は昭和の中ごろの住宅様式に復しています。甲7号は、甲社宅で誕生された黒澤映画の名優・志村喬さんの功績を展示した「志村喬記念館」として開館しました。



Ikuno Mine Older Official Residence

生野鉱山と官舎

生野鉱山が歴史上の文獻に登場してくるのは、天文11年(1542)に銀を産出したという「銀山旧記」(1690)の記述からですが、開坑はもっと古い時代にまで遡るともいわれています。この頃、中世には山名氏がこの地を治め、江戸時代は幕府領として栄えました。明治維新を控えた慶応4年(1868)、薩摩藩を中心とする官軍によって制圧され、明治維新後には日本で最初の官営鉱山となりました。明治元年には早くもフランス人鉱山技術者のコワニエ(F.Coignet, 1835-1902)の指導の下に殖産興業のモデル鉱山として近代化が図られました。

旧生野鉱山職員宿舎は、生野鉱山に赴任した官吏・技術者のための官舎として明治9年(1876)に建てられました。この頃、生野には外国人のための宿舎と職員の宿舎、それに鉱員のための住宅が数多く建てられました。生野鉱山はその後、皇室領を経て明治29年(1896)には三菱合資会社に払い下げられましたが、その時、住宅施設も一括して譲渡され、甲社宅の通称で近年まで使われてきました。現在、残存する官営生野鉱山時代の住宅施設は、ここに残る甲7号、8号、9号と、朝来市神子畑に旧神子畑鉱山事務舎として移築された生野鉱山の外国人宿舎(兵庫県指定文化財、通称ムーセ旧居)のみです。19号、20号は建設時期が明らかではありませんが、三菱合資会社へ移譲される前後に建てられたと考えられています。これらの住宅は、現在朝来市の所管下にあり、甲7号、8号、9号、19号は朝来市指定文化財になっています。

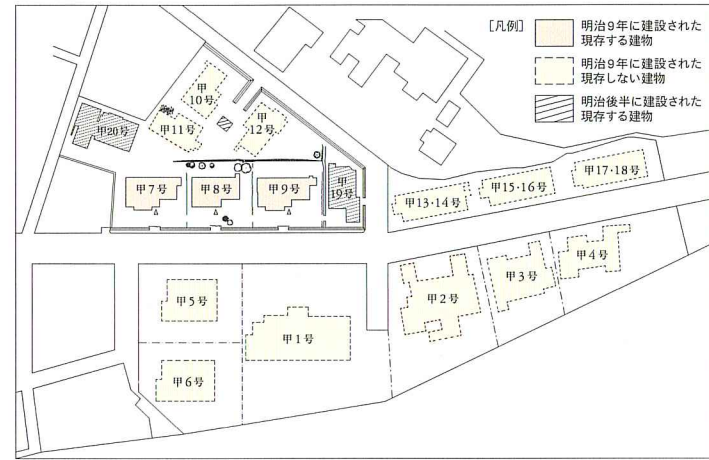
明治時代中期の生野鉱山本部の全景



生野鉱山の基礎を築いたF.コワニエの肖像



旧生野鉱山外国人宿舎旧神子畑鉱山事務舎



明治末年までに建てられた生野鉱山職員宿舎配置図

甲1号は初代鉱山所長の朝倉盛明が住んだ住宅。甲4号まで官位に応じて規模が小さくなり、甲5号～12号は同じ間取り、規模を有します。甲13・14、甲15・16、甲17・18号は二戸一棟の住宅形式であり、甲19号と甲20号はその後建設されました。現在の甲5号と甲6号は、大正3年に建て替えられました。



現代の居住様式へとつながる 旧生野鉱山職員宿舎

旧生野鉱山職員宿舎は木造平屋建、棧瓦葺き寄棟屋根のごく普通の姿もっています。このような住宅の姿は、戦前戦後の住宅にまで長く維持されてきたため、これらの建物が特殊なものとはみえないのも当然かもしれません。しかし、これらの建物が建設された明治初頭、生野には茅葺屋根も点在し、多くは切妻屋根か重々しい入母屋屋根が街並みを形作っていました。築地塀を巡らせたこれらの官舎のたたずまいは、ずいぶんと斬新な雰囲気をもった住宅として生野の人々に映ったと考えられます。

江戸時代から明治へと時代が移り、新しい時代の庶民の住宅がどのように形成されていったかを考えていくと、生野の官舎は重要な意味もっています。この旧生野鉱山職員宿舎のような住宅形式は、間取りだけみると中下級武士の住宅と近似しています。しかし、武家住宅の身分の象徴である式台に代わって生野の官舎では玄関が入口の形として現れています。寄棟屋根も武家住宅というよりもむしろこの頃入ってきた洋風住宅に似ています。間取りは二間続きの和室に縁側が付く伝統的な形式ですが、文献を探ると、当時全国各地に建てられた官舎も同じような間取りをもち、しかも明治村に移築保存されている森嶋外・夏目漱石住宅のように明治期の一般庶民の都市住居と似ています。この宿舎は近代日本の庶民住宅のルーツともいえる位置を占めていると考えられ、極めて重要な歴史上の意義を有しているといえます。



森嶋外・夏目漱石住宅(明治20年代、昭和39年博物館明治村へ移築)写真/博物館明治村提供

日本人の居住様式の変化を映す 旧生野鉱山職員宿舎

旧生野鉱山職員宿舎は7号、8号、9号は今回の修復工事に伴う調査から、すべて同じ間取り、形状もっていることが分かりました。その後さまざまな改修がなされ、結果的に違う形状で建てられたかのようにみられてきました。甲8号は、建てられた当初の姿に復されたものですが、その後台所、浴室など西側半間の増築、玄関の縮小と茶の間の拡張などが繰り返された結果、それぞれが違う間取りをもつようになったのです。

今回の修復では、そうした経年的な間取りの変化もその時々々の生活様式を反映していることから、後年の変化も残しています。甲7号は大正時代、甲8号は建設当初の明治9年、甲9号は昭和初頭あたりを目標に修復を行っています。これらの建物4棟を通して見ることで、日本人の居住様式がどのように変化してきたかを理解できる施設として修復しています。



修復された甲8号

時代の変化を残した修理方針

確実に復すことができる状態をどの時代におくかは、4棟それぞれの改修・変更の状態を調べて決定しています。修理による取り壊しをできるだけ少なくし、4棟が迎った時代の変化を残しています。

復原された甲8号からの変化を迎ってみましょう。甲7号、9号共に玄関が1間半から1間に狭くなり、代わりに茶の間が広がっています。当初の玄関はこの規模の住宅としてはかなり広くとられています。この座敷の前の取り次ぎの間だけでなく、裏手にもつながっているため、汚れをとまらぬ鉱山という職場に対応した形かもしれません。

台所も時代と共に変化しました。最初は土間であった台所には徐々に床が張られ、甲9号では勝手口を残してすべて床張りとなっています。便所も時代と共に変化し、2カ所あった便所は東面1カ所になり拡張されています。

◎修復工事のプロセス

第1段階 調査と復原案の作成



第2段階 素屋根の架構と屋根瓦下ろし、壁はつり

【素屋根】修理するときに雨、風を防いで建物を守る。工事用の足場を兼ねる

【土台】栗材を利用した角材が基礎の代わりを果たしている

【生野瓦】この地域で江戸時代から作られてきた赤褐色の瓦

【玄関】当初は1間半の間口をもっていた。敷居も当初は高く、跨いで玄関に入った。

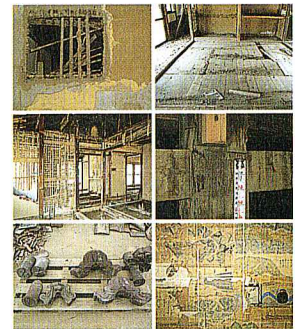
第3段階 揚屋(メンヨ)により、土台、柱の根継ぎ等を施す

【揚屋】建物全体を持ち上げて修理する方法

【根継ぎ】傷んだ部分を新しい材料で継いで修理する方法

第4段階 修理された土台のうえに下ろし、屋根修理、壁修理内部の造作等の修理を行う

土間 土台 2階 座敷 玄関 8畳 座敷 土台修理



◎調査事項

① 壁/塗重ねられた壁からの素材の変化を迎えることができ、浅葱壁が最初の層であることが分かりました。

② 痕跡/基礎や柱、小屋組の痕跡を調査することで当初の状態からの変化を知ることができます。

③ 生野瓦/生野の周辺でのみ江戸時代から赤褐色の瓦が用いられています。生野瓦と通称されている瓦の技法は幸いにも隣の神戸町に残っていました。

④ 板材/畳の下の床材はのこぎりによって製材された板を2枚に割って用いています。

⑤ 和釘/明治9年の頃には、現在のような洋釘(丸釘)が普及していませんでした。この建物では当初は和釘が用いられ、その後の修理では洋釘が用いられています。

⑥ 建具/襖の下張りに江戸時代の生野鉱山の絵図が用いられていました。

◎監修/神戸大学大学院工学研究科 建築学専攻 足立 裕司